

# 幼児の教育 9

1986

家庭・保育所・幼稚園



新刊!!!

## 子育てに関わるすべての人々に、 深い感動を呼ぶ人間ドキュメンタリー。

重い脳性まひの娘がかえってその母の人生の幅を大きく広げた。母は困難を超えて独力で保育所を作り上げ、子育て・人間・人生について誰よりも深い真理に触れた。この2巻は『障害児の娘と保育の仕事と』の著者が、自らの生い立ちから娘の出産・人生の転換を経て、心身障害療護施設の設立に成功するまでを綴る半生の記録であり、子育てに関わるすべての人々に深い唖と感動をもたらす人間の記録である。

### 人形糊の白い靴

——障害児の母となって①——

- 著者自身の生い立ちから末娘・友ちゃんの誕生。絶望と不安、障害のある子を育てながらも仕事を続けたいと願う心の揺れ動き。そして、決断。独力で保育所を作り上げる。母として、保母として障害児保育の勉強に意欲をもやす。

### ありがとう ごめんね

——障害児の母となって②——

- 友ちゃんの入学。さまざまな障害を持つ子らの発達に応じてなされる教育の現場の姿。そして、友ちゃんの卒業後の生きる場を保障したいという願い。それは、親亡きあとも安心して生活できる場を作る活動へと発展。奔走は実を結び、多くの後援者を得て心身障害療護施設『麦の家』設立に成功する。

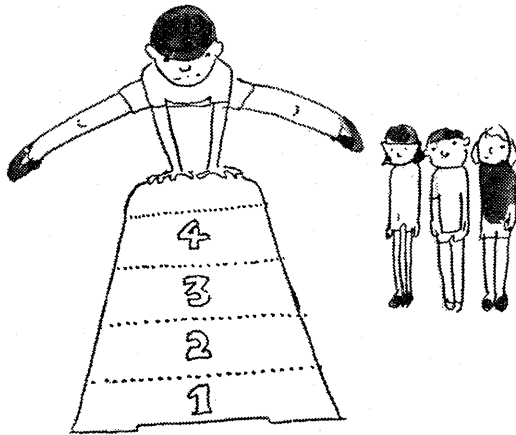
高城山保育園園長 土屋多喜栄・著 四六判・各巻256頁・定価各1,200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館

# 幼児の教育



第八十五卷

第九号

# 幼児の教育目次

## —第八十五卷 第九号—

© 1986

日本幼稚園協会

「家庭科」学習を高校での必修に……………岡田 正章…(4)

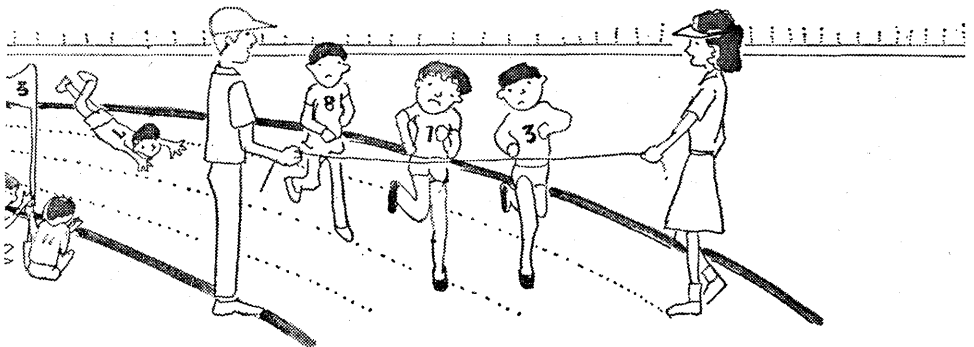
SF的読み解き 子どもという風景

第十七回 ああ名前……………堀内 守…(8)

古沢頼雄編「見えないアルバム」を読む……………津守 真…(17)

きたがわてつ・林容子著

「美土里くん ありがとう」を読む……………中村 弓子…(21)



中村妙子訳

「サンタクロースっているんでしょか」を読んで他……………向山 陽子…(27)

子どもの玩具環境を考える―歴史的観点から……………渋谷 寿…(31)

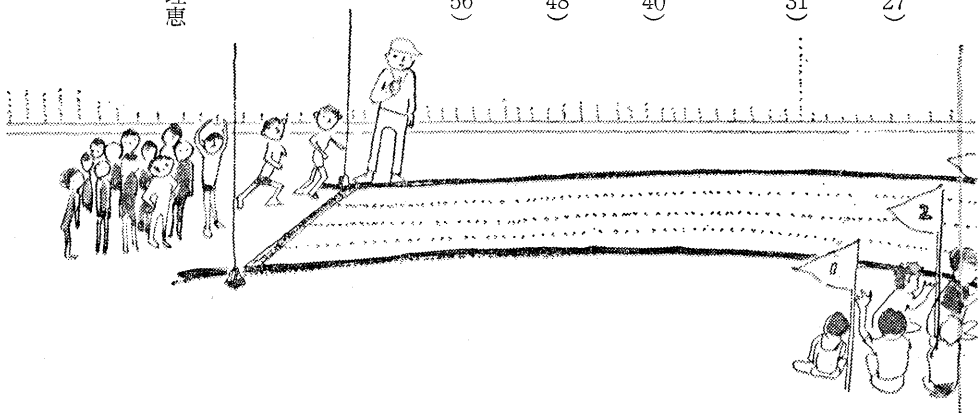
兎園随筆②痛い痛いのとんでゆけ(その六)

―友達の輪の中で……………蕪木 寿江…(40)

子どもの遊び(その5)……………E・A・A・フェルメール……………浜口順子訳…(48)

若いお母さんたちへ……………はるにれの会 川上 美子…(56)

カット・福田 理恵



## 「家庭科」学習を高校での必修に

岡田正章

学校での教育、教育内容は、子どもの興味・学校の自主性にもとづいて、できるだけ自由にすることが望ましいと考えられる。そうした見解が一般化してきているなかで、ある学習を義務づけようとする主張は、時代錯誤的なものとのそしりを免れないのかも知れない。にもかかわらず、敢えて、高等学校の生徒すべてに、男子、女子の何れに対しても、家庭についての学習を必修とさせたいという願いが大きい。しかも、その声を、今、とくに大きく出し、理解あるひとびとにもその実現を期したい。

というのは、いま、高等学校の教育課程が改訂されるべく、文部大臣の諮問機関において審議されているさなかにある。かつ、従来の「家庭一般」など家庭科に関する科目が、女子だけに必修となっていたのが、男女平等の理念にもとづいて適切でないと言われ、女子も希望するものだけが選択履習すればよいとの意見が出されている。こうした状況に照らし、いささか我田引水的な感はあるが、何故、表題のような主張をするかについて、以下

に述べてみたい。

賛否両論の入り乱れたなか、やや強引な形で特設された首相直轄の臨時教育審議会は、四月に第二次答申を出している。そのなかで、家庭教育の意識を、次のように力説している。「いじめ、校内暴力、少年非行などの教育荒廃の背景には、学校教育にかかわる問題などとともに、家庭教育の役割が十分に果たされていないというゆゆしい問題がある。

今日、子どもたちの心の荒廃を克服していくためには、乳幼児期に親と子の基本的な信頼関係（親子の絆）を形成するとともに、その上に立って適時・的確なしつけを行い、自己抑制力、他人に対する思いやりなどを身に付けさせることが大切であるが、これらは親が果たすべき重大な責務である。（以下略）」

こうしたことができるためには、PTA活動の活性化、学校教育活動への地域住民参加の推進などが望まれるとともに、「親となるための学習を充実する。この観点から家庭科学を見直す」ことが必要であるとし、そのことを、次のように説明している。

「将来、よき家庭人となるために必要な心、知識、技術が習得できるよう、年齢段階に応じた学習の内容や方法を検討する。すなわち、親およびこれから親となる者を対象とする学習の機会の充実を図る。学校教育においても、家庭科の位置づけや内容などを中心に、健康教育、徳育に関連する他の教科等との関連を含め見す。」

ここでも、学校教育における家庭科の見直しが求められている。しかし、それをどのようににするかについては、言及されていない。果して、どの学校段階で、親としての役割、

責任について理解を深める学習が可能となるのであろうか。また、その内容は如何なるものが適切なのであろうか。

筆者は、大学で、十年前までは一般教育科目の教育学で、その後は今日に至るまで専門教育科目の幼児教育学で、前者は一年生、後者は二年生を対象に教授してきている。両授業とも、乳幼児期における人間形成とくに家庭における親子関係が、人間の生涯にとって如何に重要であるかについて講義している。

受講する学生は、前者は選択科目で、人文学部だけでなく、理工学部の学生が年々多かった。後者は心理教育学科教育学専修コースの必修である。何れも男子と女子とが同数位で、教育学は、三クラスに分け、総数約千人が受講していた。

これらの学生が、乳幼児期が人間として育つ基礎であること、家庭における親子関係がきわめて重要な影響を及ぼすものであることをきき、これを理解し、選択科目であるにもかかわらず、年々受講生が増し、理工学部の学生間には、「あの授業を聞いていると、すぐくためになる」との評が広まったと聞いた。「ためになる」という考え方には気をつけねばならないが、このことは、この年齢段階では、家庭、夫婦、親子ということがらについて、自分自身の問題として考えることのできる状態があらわれていると思われる。

高等学校生徒は、年齢的にはやや低いが、わが国における共通教育の最終コースとして、国民として共通に望まれることから学習しておくことが望まれる。かつ、さきの大学一年生とほぼ同様に、家庭の在り方について身近な問題として考えることができるよう



に思われる。

また、いわゆる家庭科は、食物・衣服・住居などの在り方について学ぶというよりは、むしろ、家族の在り方とくに家族における人間関係とりわけ親子関係の子どもに及ぼす影響について基礎的な理解と強い関心をもつようにすることが緊要である。

しかも、それは単に母親の役割が大きいということではなく、父親には父親としての固有の役割があり、両者が協力してそれぞれの役割を適切に演ずることによって、家庭の幸せ、健全な子育てがもたらされるものであることを理解するようにする。

したがって、新しい内容の家庭科は、男子・女子何れの生徒にとっても、幸せな家庭を創り、人間性豊かな子どもを養育する社会的な役割を演ずることができるよう、その学習を必修とすることが望まれる。

また、家庭科の学習の過程において、幼稚園・保育所・乳児院など幼少な子どもがいる施設に実習的に体験学習することは、単に頭だけで理解することにとどまることなく、主体的に自らの力とすることに大きな意義があることであろう。今日、ほとんどの子どもたちも、一人っ子もしくは二人きょうだいで幼ない子どもとのふれあいが乏しいことから陥る自己中心的な生活態度を改めることにも役立つであろう。ただ、これらを適切に指導できる教授者の養成も新たな課題となるが、それらをものりこえ、よき人づくりのわが国としたい。

(明星大学・宝仙学園短期大学)

## 第十七回 ああ名前

堀内 守

「名前」というものはふしぎなものである。

なくては困る。しかし単なる符号でもないことはたしかだ。

命名という行為は、でき合いのレッテルを選びとるようなものではない。いろいろと材料を集め、古今東西の文献を頭の中で整理し、識者（このうちには先輩だの、年寄りだの、いろいろな人が入る）の意見を徴し、さて、その上で選考が行われる。音、字画、字形、意味、その他がしだいに固まっていく。しかし、この経過は、

落語の「寿限無」とは反対である。よい名を全部つけるわけにはいかないからである。

祈り、期待、見栄、テレ等が織りなすこの命名は、名づけられる子の側とは別のところで取り行われる。秘儀、秘蹟、呪術的な匂いもする。

ところが、そんなにしてつけてもらった名前はご当人の気に入るかどうか。それはまことに微妙である。

もちろん、当初はそんなことはわからない。自己意識が生まれるまでは名前もつばら受け身的な形で使われている。その文脈は、場面によって驚くほど変わる。

たとえば「太郎」や「花子」——というのが代表的なナマエのように思われてきたが、統計的には、この名前は少ない——が、他人からその名を呼ばれる場面では何が起ころのか。「太郎や」、「花子よ」というような短いセリフでも何十通りもの演技で上演が可能である。

「太郎や（いい子だね）」「太郎や（いけません）」「太郎や（早くやりなさい）」「太郎や（たのむよ）」等々、何通りにもなる。おまけに、このうちの「太郎や（いけま

せん)一つとってみても、太郎と相手の人間関係(間柄)によって何通りにも変わる。

こんなに複雑なドラマをよくもまあまぢがえないでやれるものだ。しかし、また、よくまぢがえて叱られたり、恥をかいたりするものだ。と、双方を含めてふしぎに思うのがよいようである。

このようなことを繰り返していくなかで、無限のニュアンスを感じとる力もできていくのである。そして、「あ、いまあの人はやさしい声で『太郎ちゃん』などと呼びかけてくれたが、あれは別のだれかがいるから、その人の眼を意識して、無理な演技をしているのだな」などと感じとっていく。それと裏腹な現象が、「太郎」という名前が自分と一体化し、骨肉化していくということなのである。

### 骨肉化とは

この「骨肉化」という現象はもつとふしぎである。

「一体化」も「アイデンティティー」という心理学・精神

分析学・社会学・教育学の礎石の一つのように見なされているが、「骨肉化」の方は「血肉化」とも表現され、「インカーネーション」という宗教用語に由来する。比喩的に「血や肉になる」と理解されているのはご存知のとおり。

しかし、名前がどうして自分のものになるのか。これを「我有化」などというドキッとするようなタームで表現し、説明したつもりになっている分野もあるから注意を要する。要するに、比喩としてしか表現できず、またどうしてそんなことが生まれるのかメカニズムがわからないのである。わからないけれども、大変大事なことなのである。

早い話、あなたが同姓同名の人に出会った時の変な気分についていねいに分析してごらんになるとよい。大人であるがゆえに、この気恥かしさは増幅もされ、また逆に抑制もされるのが本当のところだろう。

子どもの場合にはもつと開けっ広げになる。この場合は姓よりも名の方がモンダイになる。「太郎」が別の「太

郎」に出会う。「花子」が別の「花子」に出会う。別の  
人なのに、なぜ自分と同じ名をもっているのか。(差異  
と同一。これだけでも大変なテーマになる。現にその題  
のもと、大部の本を書きあげた人もいる)。いや、その  
前に、相手も自分と同じ名前だと知った際の、親近感と  
嫌悪感の入り混った、身の置きどころなき気分はどうだ  
ろう。

「あちら」の人が「こちら」とどこか重なっているよう  
で、またどこか離れているようで、〈自分〉と〈あの入  
〉という輪郭も融けて、主人公は〈場〉に代わる。だか  
ら、その〈場〉にいたたまれなくなる。

「骨肉化」ないし「血肉化」とは、こんな面から少しず  
つ明らかにされていく。

名前は符号じゃない。レットルでもない。何となく自  
分そのもののように思えるようになる。それには、他者  
との出会いを重ねていかなければならない。つらい、楽  
しい、いやな、面白い、悲しい、うれしい、惹かれ、反  
発する……というような相矛盾した中で。

### 我有化

「ガニールカ」ひどい訓み方。でも「わがものとする」な  
どという表現も、いかにも間のびしている。認識論の上  
では大変大事な概念なのでありまゝす。でも、認識ロン  
者の口にかかると、チンプンカンブンになってしまいう  
で、ここでそうならぬよう、ある場面を取りあげ、その  
機微を味わっていただくことにしよう。

太郎がたくさんの玩具をもっていたとする。そのうち  
のいくつかはもう飽きてしまつて、だれかにあげようと  
納得していたとする。そこへ花子が遊びに来た。太郎は  
気前よく花子にその玩具のいくつかを与える。

花子のもらった玩具で遊びはじめ、それに夢中になり  
はじめ。

それを見ていた太郎は急に、花子からやったはずの玩  
具を取りあげてしまう。

よくあることなのだ。あまりにもありふれているか  
ら、この意味は軽く扱われてしまうのだが、ここに「血

肉化」や「我有化」の正体が見えている。

太郎はその玩具に飽きていたはずだった。それなのに、花子がそれで楽しく遊ぶのを見て、新しく遊びの意味を見つけ直したのである。というように、カッコよく言うよりも、この底には嫉妬が生まれていると言う方がピンとくる。この嫉妬が生まれるには「花子」という他者がいて、遊びを見せてくれることが必要である。太郎はそれを見て、「自分にもあのように楽しく遊べる可能性がある」ということを再発見し、その「可能性」を花子に渡してしまったという反省をするうち、自分で自分をどうしていいかわからなくなったのである。

自分で自分をどうしていいかわからない。

このことは〈自分〉が二つに分かれていることを示す。〈見ている自分〉と〈見られている自分〉。この二つがうまくバランスを保つ——そんなことはめったにないが——と、一応〈自分〉は意識の表面から退いている。つまり、あえて〈自分〉を意識せずとも、フツーに「自分で自分をどうしていいか」処理しているのである。

これはフツーの常識とは反対の考え方である。常識では、〈見ている自分〉と〈見られている自分〉とがうまくバランスを保つのが理想とされ、それが推賞され、何となくそれが容易であるかのように思われているのだから。

### 名の文法

では「名」にまつわる密林の探検に出かけよう。

この国では素朴な実在論が支配的だ。だから「名は体を表わす」というような諺がはびこっている。あまりよい名前をつけたがすでに「名前負け」をしたなどともいうが、これも「名は体を表わす」をひっくりかえした考え方にもとづいている。

古くは言霊思想という呪術にもとづいている。「名乗る」ということは大変なことだった。万葉集の第一巻の巻頭の長歌が思い出される。天皇が野原で菜を摘んでいる乙女に「名乗れ」と呼びかけ、まず自分が「名乗」っている。「名乗る」「名告る」。沈黙は拒否を表わした。

これはいまでも変わらない。

「名にし負はば、いざこと問はんほととぎす」などもそのうである。

「名を成す」「名を挙げる」「名を惜しむ」などもこの系譜に属する。

と、まあ、妙なことを書きはじめたが、ここはこのぐらいでやめておいて、日常幼稚園で行われている点呼、出席を取ること、子どもや先生の名を呼ぶこと、その他の日常的な場面にひきつけて考えてみたいのだ。

「その赤いセーターの人」と呼ばれるのと本名を呼ばれるのでは大違いであろう。「はい、その三番目の人」と呼ばれるのと、本名を呼ばれるのでは大違いである。「○○さん」「○○君」「○○ちゃん」「○○殿」「○○様」「○○公」。名前がないという場合でも「その名無の権兵衛さん」とちゃんとしかるべく名で呼ばれる。これはほかの言語圏でも同じである。「あーと、『お名前は何といたしますか』さん……」と呼びかけられることが多い。

ことばの交換が人間関係の承認なのである。

さて、同じく日常場面。「何人いますか」「はい、十人です」。これが少しあらたまると、「何名いますか」「はい、十名です」となる。こうなると、「人」名」となる。この数学？の意味はあまり問われず、それこそふつうは「数詞」という文法上の約束事だと思われる。だが、はたしてそれでいいのだろうか。

音声学上は「何人いますか」「何名いますか」では大違いである。「ナンニン」という「ン」のリズムが「ナンニン、イマスカ」にリズムを与え、しかるゆえに「ハイ、ジュニン、デス」にもリズムを与える。時には「ハイ、ジュニン、デス」となることもある。リズムがそれを呼ぶのである。ところが「名」の方はそうはいかない。「ナンメイイマスカ」でわかるように「イ」が重なって、リズムをこわす。したがって、ていねいに聴いてみると、「ナンメイイマスカ」となって「エイ」に変じてしまっている。

事は数学や文法学のレベルから音声学上の問題、音楽

上の問題、ドラマ上の問題に広がり、同時に日常の実践場面に戻ってくるのである。

### 名も知らぬ遠き島より

島崎藤村の詩に「椰子の実」と題するものがあって、その初めの一行が「名も知らぬ遠き島より」となっている。

「名も知らぬ」ではないかと言った人もいる。けれども、そういう意味上の理屈はこの際おいておくことにしよう。それよりも、この「名も知らぬ」がいかにも利いているということを考えてみようではないか。

これが特定の島であってはつまらない。特定できぬところから想像力は広がり始めるのだから。ノスタルジア、ロマン、ファンタジア、いろいろ言われるが、「名も知らぬ」は利いている。いや、それだけではない。椰子の実に「汝はそも波に幾月」と問いかけていることと対<sup>ひ</sup>にして考えねばならぬ。「いずれの日にか国に帰らむ」と思をはせているこの詩の主人公は自分も「遊子」と

いう身をもっている。彼は椰子の实の運命に託して自分を語っている。

愛知県の渥美半島の先端にはこの詩にまつわるいわれを記した碑が建てられている。民俗学者の柳田国男が椰子の实の流れついたのを見、このようにして日本人の先祖たちは南方からやってきたのではないかと考えた。藤村はそれを耳にし、この詩をつくったのだという。

それにしても「名も知らぬ」は面白いではないか。もし、本当に「名も知らぬ遠き島」なら、「名も知らぬ」なんて言う必要はない。実用論者ならそう考える。しかし、人間の言語とはふしぎなもので、いま、ここには、ないものを表現できるという特性をもっている。のみならず、ないものをないままにしてはおけないのである。だから、わざわざ「ない」と表現する。典型が子どもではないか。その「ないないづくし」は、素朴實在論をはるかに超えてしまう。

### 生の余剰

「ななしのごんべえ」のような表現は、意味の余剰のあらわれなのである。人の名を眺めていると、その名に仮託されたさまざまな思いが湧きあがってくる。その多くは「かくあれかし」という期待に溢れている。美しくあってほしいという祈りが「美子」「美江」「美代」を生み、健康であってほしいという期待が「健一」「健」などを生む。日本人の名前のなかで多い漢字といわれる「和」「洋」「陽」なども、感性の古層を示すように思われる。

名のルーツは、生の余剰にある。したがって、「名は体を表わす」ことはない。名と生とは追っかけっこをしているようなもので、たえず可能性の世界をつくり出している。

### 園名の記号学

さて、幼稚園の名称を見てみよう。そこにはいろいろな系譜の名前がある。名門になった園、いいですね。

「園」なのですから。

実はこれも深い深い精神分析が必要。なぜ「園」なのか。それについての名著もたくさん出されている。「園」のそもそもの発端は（基本になっていく分類の基準は）、まわりを野生が取りまいていて、内部は人工の場というものでした。「園」ならばこそ、平和で平穏というイメージだった。時がたち、「園」はイミを拡大し、それと同時に抽象化していった。「学園」「学びの園」などが典型である。動物、植物園などの「園」が一方にある。他方には料理店、レストランが「園」を名称に使っている。

公立の幼稚園は設置形態を名にしている。私立の保育園は、地名ないし抽象名詞。それもメルヒェン風の名が多い。いずれにしても、野生は遠ざけられ、「なかよし」「希望」「平和」「みどり」「青空」等々が記号として人気を呼んでいる。

このにぎにぎしい名前の群のどまん中に立っていると、生の余剰が身にしみてくる。

アダ名がある。忌み名がある。タブーもある。選好の



規準も時と場によって変わってくるが、いったんできあがって、伝統ができあがると、名門の名称は容易に変えられなくなってくる。名折れになるからである。

名門が名所になり、名譽ある名聞が広がりはじめると、名取りや名寄せよろしく名声があがる。名画になったり、名歌にうたわれたりもする。名望があがり、名木や名宝で名を成すにいたる。

### 身を立て名を挙げ

「仰げば尊し」の歌とともに全国に広まった「身を立て名を挙げ」は、今日では色あせているように見える。けれども事はそれほど単純ではないようである。

たとえば大学の名前も、原理的には幼稚園のそれとさして違いはないのだから。国公私立の大学も北から南まで千校を越えたが、それを全部数えあげるのは大変なことである。

わざわざ「国立」という字を入れている大学もある。

これを「コクリツ」と読ませているのが「横浜国立大

学」。私立の「神奈川大学」や「関東学院大学」と區別するためであろう。「横浜市立大学」もあるのだから區別するには「国立」を附さなければならなかった。ところが私立の「国立音楽大学」もあるから事は面倒である。この場合はもともと地名から来ている。

「一橋大学」は「国立」だが、「一橋」にはなく、「国立」にある。その名の由来は、神田一ツ橋が発祥の地だったから、その発祥の地から来ている。

「東京」には存在しないのに、名称上「東京〇〇大学」を名乗っている大学も右に準じているのである。

筆者は先年「センター」という名称もっている施設や団体が急増しているのを記号学の立場から分析してみた。(『知の喚起力』第一章)

「センター」はものすごく多くなっている。日本中どこへいっても「センター」がある。それは情報化社会を反映した現象であると思う。「センター」が一つだけと考えられた時代と異なり、「センター」は相対的なものであり、いくつあってもおかしくない時代に入ったのであ

る。この勢いは当分続く。「児童センター」「子どもセンター」という名称もある。

あまりに多いものだから「センター」ということばが何を指しているのか、しだいに不分明になっていく。輪郭が融けていき、他と重なってきってしまったからである。「中央センター」とか、「駅前センター」まで出現し、「ターミナル・センター」が出現するに及んでは「センター」は自己矛盾、自家中毒を来たしかねない。

しかし、ここでも素朴実在論はとつとつに乗り超えられてしまっている。「センター」を「中央」とだけ固く信じこんでいると、「センター」が思わぬはずれにあるのを発見して驚くというようなことにもなりかねない。

### 子どもの名

子どもの名前をつくつくと眺めてみよう。

そこには人間の実存が重々しく、しかも可能性をもった形できらめいている。一つの園の中だけでもまことに美しくきらめいている。それを並べ直し、ひとつの図柄

にまとめてみよう。あの子、この子。現にいろいろなことをやっている。やがてこの子はどうなるのだろう。大げさに言えば、来し方と行く末ということになるのだが、実のところ、この名をそういう期待をこめて呼んでみることは毎日やろうとしても、むずかしい。しかし、始源に戻るのにはたまに戻るだけでよい。せめて、誕生日ぐらい、そのい、われをしみじみ味わってみたい。やがて、おとなになったあるとき、だれも自分の名に少しレてみたり、あぎれてみたり、少し気にいってみたりするという予想も含めて。

しかし、名は、やっぱり名案だったのである。有名、名譽、名分、汚名とくると、どきりとするが、署名などはまことに生活の匂いのする行為なのだから。

(名古屋大学)

\*

\*

古沢頼雄編

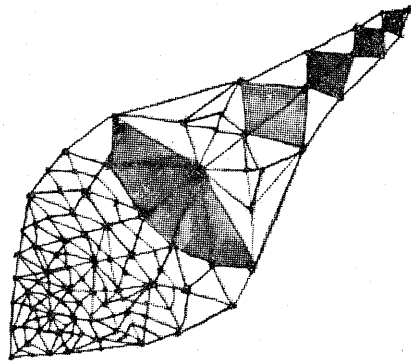
「見えないアルバム」(彩古書房)

をよむ

津 守 真

二十一年間にわたる子どもの成長に、「研究者」としてかかわった編者と、夏の合宿共同体験を中心に協力した多数の若い人たちと、その子どもたち自身と、親たちと、子どもをめぐる「地域社会」の人々の相互の成長のダイナミクスを、この書物は、それぞれの人々の証言を通して明らかにしている。一見平易に書かれているが、稀に見る書物である。

「研究者」としての編者は、子どもとかわるうちに、「自分自身は『研究』という枠以上の責任をもっている」ことを考えるに至る。そして、研究者というよりも、人間として一緒に生活するのにふさわしい者は何かを探究する者となる。



「地域社会」という語をこの書物では使っていないのだが、私には、ここでの試みは現実の地域社会のひとつの縮図のように思える。編者はこれをヒューマン・リレーションシップ・ラボラトリー(HRL)と呼び、夏のキャンプを中心に構成する、人間関係体験の場としている。二十年間にわたる子どもの成長が、単に個人のことにとどまるのではなく、一緒に生活する大人の成長があつてこそつくられる人間の成長の過程は、ここでの試みによって、大まかに示されたようにすら思う。

書物の全体は、四つの部分に分けられる。第一は、編者の古沢頼雄自身の立場を述べた部分、第二は、夏のキャンプに長年にわたつて参加した、当時は若かったスタッフたちの子どもとのかかわりについて、スタッフたちが記した部分、第三は、これに参加した子どもたち自身が、この間にとくにスタッフたちとの間で体験したことを記した部分、第四は、スタッフ自身がこの場を通してこの間に体験し学んだ自らの成長を記した部分である。この間に親の体験もちりばめられる。

このような夏のキャンプの場合、しばしばリーダーの主導的な計画や、強烈な個性が、スタッフや子どもたちを方向づけ、その枠内で記録し、話し合い、早急な研究的議論がなされやすい。この書物の場合、そのようなことがない。参加する人々すべてが、同等の立場で、自分できめて、自分で行動することが許されている。そのことをひとつの技術として用いているのではなく、リーダーである編者自身が自らを徹底してそのような立場においておられるように、私には思われる。この書物でも、編者の執筆部分ごく僅かであつ

て、大部分が参加者である他の人々によって書かれていることは、このキャンプの性格を示している。

スタッフたちの子どもとのかかわり方も、「ひたすら目の前の一人一人の子どもの次から次への要求や気持ちに耳を傾け、必要な援助を積み重ねてきた」と述べられているように、子どもに対して、心身の労を払うことを惜しまない態度である。

そのことを、子どもたち自身がどのように感じ、受けとめてきたかが、いまや二十歳をこえた子どもたち自身が執筆している。はじめは「怒らない」やさしい先生を、子どもたちがどのように考えるようになるか、青春期に入るころに、大人の気持とのズレが生じてくる時がある、それがどのように経過してゆくかは、このようにしてつくられたコミュニティでなければ、明らかにしえないものであろう。

スタッフの多くは、かつては学生であり、現在は、社会人、教師、主婦などである。その人たちの現在にとつて、この人間関係体験の場での「とまどい」に当って学んだことが、いまなお生きていることを、この手記は知らせてくれる。このスタッフたちも子どもたちも、成人し、壮年期になって、それぞれが次の世代に向って、次の世代の人々と新たな社会を形成しつつある。このときに、ここでの体験が、人間理解の根底として深く根ざしていることを知るのである。

私は、この書物をよみながら、幼稚園、保育園、学校施設などのことをたえず思い起さ

せられた。この書物が、夏のキャンプの場のことだから、夏のキャンプにだけ通用するのだというようには、私には考えられない。それはコミュニティの中での人間の成長に、普遍的なものを含んでいる。

編者が処々に述べている命題「おとなの心的展開なくして子どもの成長はない」ということは、ことばはいろいろに言いかえられても、保育の実践の根本である。このことを、ダイナミックに、平易に示しているこの書物を、丁寧によまれることをおすすめた。場が異り、人が異れば、具体的には違った生活がつけられる。しかし、人間にかかわる仕事をする者にとって、この書物の中に脈打っているものの見方は、共通のものを含んでいると思う。

〔「見えないアルバム」彩古書房 一九八六年 一、五〇〇円〕

（愛育養護学校）

きたがわてつ・林容子著

「美土里くん ありがとう」(あけび書房)

を 読 む

中 村 弓 子

私はその少年、美土里くんを知ったのは、七・八年前にたまたま見たテレビのドキュメンタリー番組によってだった。

それは青森に住む重度の筋萎縮症の少年で、医師には「四歳くらいまでしか生きられない」といわれていたのが、つねに死の危険と隣り合せのまま二十歳になろうとしていた。体全体の筋肉がまったくそげてしまっ、まるで指人形のように、服の下はほとんど空っぽのようなその様子は、見る者にいかにも命が危うい感じを与えた。

しかし同時にこの脆い肉体に宿る精神の強靱さにも目を打ったのだ。美土里くんは推理小説の大ファンで、いま自分自身で作品の執筆を始めたところだという解説だったが、その執筆風景が非常に強い印象を残した。美土里くんは寝たまままで天井から吊った革

ベルトにだらりと力なく手をかけている。一方、ベッドから少し離れたところにあるタイプの文字盤の上を光が移動しており、必要な文字の上に光が当たった瞬間、美土里くんが手をわずかに動かすとタイプに文字がガシャと打たれる仕組みになっている。思考を練るだけでも苦勞なものを、それを文字化することがさらにこんな大仕事となっているのだ。時々沈黙を破ってはいつまで続くとわからぬこの「ガシャ、ガシャ」という音を聞きながら、私はこの少年の精神の驚くべき強靱さを身をもって感じていた。

もう一つの印象的な映像は、国鉄勤務のお父さんの退職金を前借りしての十日間のヨーロッパ旅行の際のルーブル見物の模様だった。美土里くんはルーブルにあるダ・ビンチの「洗礼者ヨハネ（キリストに洗礼を授けた聖者）」の絵が大好きで、そもそもヨーロッパ旅行そのものが、美土里くんのこれを自分の目で見たいという希望を叶えるために計画されたものだった。この画が大写しになった。それは暗い闇の中に立つ洗礼者ヨハネが、ほとんど優雅とってよいほど美しい微笑を浮かべて右手で天をさしている姿である。それは見る者になにか招かれているという感じを強く与える絵であり、神秘的であると同時に、あまりにも美しいものの与える一種の不吉ささえ感じさせる絵である。そしてこのヨハネの美しさは、そのままこの絵をこよなく愛する美土里くんの心の美しさの化身であるような感じも与えたのだった。

さて、見ることを切望していたその絵を見た満足感に浸りながら秋の金色に輝く並木のあいだを両親に押しももらって散歩する車椅子の美土里くんの遠景は、平和である



と同時になにか言い表し難い悲しみを私に与えた。美土里くんの味わっている幸福がもう彼岸の世界に踏みこんでいるような感じがしたからだ。

このドキュメンタリーで印象に残ったもうひとつのこと、それは美土里くんの世話をする両親の明るさだった。それはおそらく美土里くんを育てることが両親にとってただロスなのではなく、美土里くんからなにかを受けとっているからだ、あの危うい肉体に宿っているだけにその強さと尊さの強烈に目を打つ根元的な「いのち」を美土里くんから受けとっているからなのだろうと私は思った。

さて、この放送から五年後、今から三年前に今度もまた全く偶然に、あの美土里くんのその後を記録するドキュメンタリーを再び目にしたのだった。美土里くんはあの執筆中の作品を『ドライツェーン』という四五〇枚の推理小説に仕上げて出版し好評だったということだった。しかし国鉄勤務のお父さんは、それから間もなく胃ガンで、たった一ヶ月の入院で死んでしまったということだった。美土里くんもお母さんも懸命にその衝撃に耐えていたようだったが、それから三ヶ月後、美土里くん自身、ある会合で食べものを喉に詰まらせて仮死状態になり、いったん回復したものの、とうとう数日後に亡くなったということだった。病院の集中治療室で、目しか動かすことのできない虫の息の美土里くんのベッドに、美土里くんから見える位置にあの「洗礼者ヨハネ」の絵がくくりつけられていた。カメラは美土里くんの頭のほうからそれを写した。こちらを向いてあの美しいヨハネが微笑み天を指している。それはもう肉体的にはほとんど存在していない美土里くんの

いのちが向っている彼岸の入口に立つ天使のごとくであり、美土里くんが究極的にこの絵のなかに魅かれていたかを明らかにしているようだった。

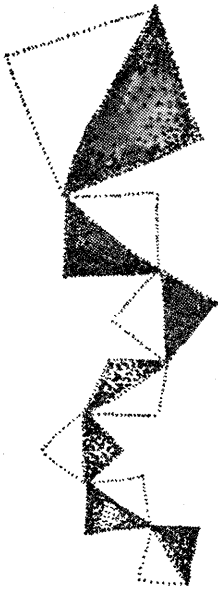
偶然の出会いであるこの二回の放送を通じて美土里くんという少年は、深くて強靱な美しい「いのち」を、ちょうど美土里くんが両親に分け与えたように私にも分ち与えてくれたのだった。

その美土里くんについての本が出たのを、先日たまたま本屋でみつけた。一種のなつかしさと共に、もっと色々知りたいと好奇心も感じた。この本は美土里くん一家と親しくして、「美土里」という曲も作ったフォーク歌手のきたがわ・てつ氏と美土里くんのお母さんの共著である。そこには美土里くん自身の書いた文章も多数あり、美土里くんの間像をさらに内側から知ることができるといえる。

高校時代の美土里くんが書いた数学と宗教についての文は、あの洗礼者ヨハネの画家ダ・ビンチにも遙かに通じるような、科学と宗教の接点をめぐる非常にユニークなエッセイである。——平面に描いた二人の人間は互いに顔を見ることはできない。しかし我々三次元世界の人間からは彼らを同時に見ることが出来る。同様に神が四次元以上の空間に存在すると考えれば、ちょうど三次元から見た二次元のように我々の三次元の世界をすべて見ることができ、神は常に我々の側にいて、しかも我々には見えない所にいるのだということになる。そして我々は、死によって三次元の肉体から離れ高次元の精神だけが神の許に行けるのだ。——と美土里くんは書いている。

また国際障害者年には「今年の障害者年は、障害者が普通の人の気持ちになること、普通の人が障害者の気持ちになること。それが出来れば良い。」と美土里くんは言っている。この障害者観は、美土里くんが亡くなる直前に見た青森美術会小品展について書いた文と不思議な呼応を見せている。

自分はこの展覧会に対してある種の固定観念を持っていた。「青森美術会」という名前がアンチ都会といった、狭いナショナルリズムに彩られた地方芸術を連想させたのだが、しかしこうした考えが間違いであったことを百数十点の絵が自分に悟らせてくれた。むしろ地方性は無意識のうちに表われてくるものであって、この会場を満している、平凡な事物を生き生きと描いた絵は自分に新しい青森の美を教えてくれた。「地方の時代はここにあったのだ。七面倒くさい絵画論など、観る側にはいらぬ。ただ画家との一刻の共感があ



れば、それだけで私は幸福なのである。」と美土里くんは文を結んでいる。

「青森美術会」が目ざすべきものが青森ナシヨナリズムではなく純粋な絵画性そのものであって、そこにこそむしろ真の青森の独自性も出てくるように、障害者が目ざすべきものも、(そして普通の人が目ざすべきものも)それは純粋な「いのち」そのものなのだろう。それは美土里くんの生涯の軌跡が訴えているものでもある。

この本の題名『美土里くんありがとう』は、美土里くんのお母さんの次のエピソードから来ている。美土里くんが食べものを喉につまらせたのをきっかけにして死んだのは自分の不注意ゆえだと自責の念にかられて沈んでいたお母さんが、ドライブ先で「このまま谷に落ちたら」と思わずつぶやいたとき、同乗していた美土里くんの友だちが、前に美土里くんが、「死というものは自分で選ぶものではなくて、神さまが与えるものだ」と言ったと伝えたのである。美土里くんがお母さんを慰めるために用意したようなこの言葉にお母さんは心の中で何度も「美土里くん、ありがとう」とつぶやいたのである。

お母さんだけではない、この本を通して美土里くんに出会った人はみな、美土里くんの「いのち」を分け与えてもらって「美土里くん、ありがとう」とつぶやくことだろう。

(お茶の水女子大学)

「サンタクロースっているんでしょうか」

——子どもの質問に答えて——

中村妙子訳・偕成社

今の私に「本を一冊あげてほしい」と問われたら、季節も、問う人の年齢も何もとびこえて、この本をおすすめします。

一八九七年九月二十一日、ニューヨーク・サン新聞の社説です。真夏にサンタクロース?!”と思われた方、私だって真夏の号にこの本をとりあげるには勇気がいりました。でも、この社説が載ったのも九月だったのです。

何年前か前、大学のプレイルームで、訳者の中村妙子さんが読んでくださったのを耳にしてから、読んで、耳で聴いても、心に暖かいものを取りもどせる幸せに浸りたくて、声を出して読んでみます。とびきり心をこめて。

「サンタクロースって本当にいるの？」と新聞社に投書した八歳の女の子。

「新聞社にきていてごらん。新聞社がいるといたら、そりゃ、本当にいるんだらうよ」と娘に答えた父親。

この投書を取りあげた編集長。

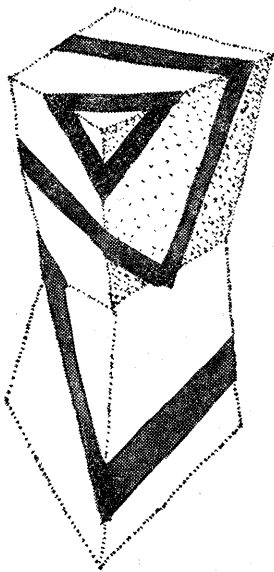
大人として真剣に、真正面からこの問いに答えた新聞記者。

そして、今では、この社説は古典のようになって、クリスマスマスの季節になると、アメリカのあちらこちらでくり返し掲載されているという事実。

アメリカから帰っていらして、日本で訳されていないと知り、びっくりして、いても立ってもいられず訳しました、とおっしゃった中村妙子さん。

これらのどの一つをとってみても、「やっぱり人間っていいな」と思えるのです。

19世紀末の物質文明、合理主義の風潮が強まる中で書かれたこの文章を、20世紀末の今、21世紀に生きていく子ども達、大人達に是非読んでほしいものです。



# 「子どもは 小さな哲学者」

ガレス・B・マシューズ著

鈴木晶訳 思索社

「主人が訳しました。楽しいですよ。」と、友人がこの本を送ってくれました。読みすすむにつれ、「そうだ、そうだ、子どもの頃は誰だって、ごく自然に、自由に、哲学することを楽しんでいたのに、〃社会化〃とか、〃常識〃がこの楽しみを奪っていく。誰もが『どうして?』と万物に疑問を感じていた時代があったのに、〃学ぶべきこと〃にすりかわってしまう。大人になるって何だろう。」と考えさせられる。

娘が二歳になったばかりの頃、自分のことを「ボク」「オレ」といつていた。ある日、「みづぎちゃん女の子だから、ボク、オレじゃなくて、ワタシでしょう。」と教えてくださった方がいた。すぐさまみづぎのいうには「オレナノ、ボク ト オレ ト ワタチハ オンナジヨ。」

先日も、一人で排便、排尿できるようになった娘がトイレから大声で叫んでいる。「オカアサン！ ウンハ イシダネ!!」

いずれの時も私は「みづきってすごいね」としか言葉が出なかった。著者は、このような子どもの発言に含まれる、哲学的思考の芽を私達に示してくれる。

子どもの質問や、発見に、すぐ「教えて」しまう時がある。そのすぐ後で、あの質問はもっと深い意味があったのではと気づく。

私自身の社会化、常識化されたものの見方、考え方を子ども達から、ゆさぶられつつけたい。

マサチューセッツ大学の哲学科教授の著者はいう。『認識の発達の研究をした(略)心理学者ピアジェが、幼児の哲学思考に対して敏感でないとしたら、いったいだれが敏感なのだろうか。他の発達心理学者ではあるまい。教育理論家でもないだろう。(略)たいいていの子どもはごく自然に哲学の問題に興味をもつものだけだということを理解した、唯一のおとなは、童話作家達である。少なくとも何人かの童話作家である』と。



# 子どもの玩具環境を考える

——歴史的観点から——

渋谷 寿

現代は、経済と新技術の論理に基づき大量生産されるプラスチック玩具・電子技術を導入した玩具等が主流になり、子どもの本来的遊びの世界をも根底から覆そうという勢いである。

しかし、一方ではボール・コマ・けん玉・凧・ひもで引く動物や人形といった玩具も確実に子どもの遊びの中



に存在してきた。このボール・コマ・ひもで引く動物や人形といった玩具は、古代エジプトにおいて既に子どもたちに玩具として与えられていたものである。つまり、

現代のボール・コマ等と古代エジプトのそれらとは基本的に全く変わっていないと言える。また、これらの玩具は、古代エジプト以外に、時代・場所・人権等を越

え、普遍的に全世界に存在していた。この普遍性は子どもと玩具の本質的な関係のあり方を数千年の歴史を通して明らかにしているのである。

ところが、近代のプラスチック玩具やファミリーコンピュータのような玩具の登場により、子ども本来の遊びと玩具の関係が、大きく変貌しようとしている。そこで、玩具と人間とのかわりを歴史を通して概観し、人間と玩具のかかわり方について考えてみたい。

#### 玩具の歴史が語るもの

ヴァルター・ベンヤミンは、太古に存在していたボール・輪・羽根車・凧といった玩具が、当初は宗教的色彩を帯びたものであって、大人にとって無意味であったからこそ、ほんものの玩具になりえたと語っている。<sup>(注)</sup> また、赤ん坊に初めて渡されるガラガラも当初は悪魔払いの意味を含んでおり、大人が子どもの玩具として意識して作ったものではなかった。これらは時代とともに子どもの手に渡り、しだいに普遍的な玩具に広がっていった

わけであるが、これらは、玩具とは無関係な精神性と遊びへの欲求にその起源があったのである。この意味で、大人の玩具への介入はなかったと言える。

しかし、文明の進歩とともに、玩具が一つの産業になり、工業時代に入ると、玩具は子どもの本来的欲求から離れた高度なものに変わり、それは、現代の量産される玩具にまで続いている。

玩具の発達とともに、古来玩具に備わっていた自然・神・宗教性は顧みられず、自然科学がそれに変わって台頭してくる。そして、子どもをターゲットとして続々開発される商品としての玩具の他に、近代になり人間の成長に及ぼす影響を考慮に入れた玩具が出現してくるのである。

この玩具の歴史はごく新しく、フレーベルの恩物が最初であると言われている。フレーベルは森羅万象の裏にある数量的・幾何学的な自然界の法則性を内在した玩具として恩物を位置づけた。また、モンテッソーリは自然科学的な視点に立って、感覚から観念へ発展させる教材

として数量的に秩序だった多くの教材を生み出した。その後、こういった教材機能をともなった単純なフォルムの玩具が数多く世に生み出されていくことになる。

このように、現代の教育的に考えられた玩具の主流は自然科学的・発達心理学的に発展・展開していくのである。

こういった考え方に対して、ルドルフ・シュタイナーは全く異なった視点で子どもの成長をとらえ、玩具の重要性を提示した。彼は精神科学的な人間観に基づいた、人間の成長にとって必要な玩具のあり方を明らかにしている。シュタイナー教育におけるその玩具は布を結んだ人形であり、自然素材による手作りの玩具である。人間に関するあらゆる問題を科学的に解決できうると信じていた人々の前に、人間の心・精神・魂・霊性をも含めて人間の成長をとらえる精神科学的観点に立った玩具の見方が生まれてきたのである。

また、シュタイナーのほぼ同時期に、桜沢如一という日本人が、ヨーロッパにおいて古代中国の易的宇宙観

を基盤にした食養論を展開し、東洋の精神性が西洋において受け入れられつつあった。

この食養論は、現代の自然食運動の中では最も重鎮の位置づけがされているとも言われているが、食の問題だけにとどまらず一つの人生哲学に高められた。そして、子どもの教育の問題にも言及されており、玩具は子どもの意志教育においては不要であるという東洋的教育観を提示しているのである。

以上、玩具と、玩具の考え方の歴史を概観したわけであるが、物があふれ、お金を出せばあらゆる玩具を買うことのできる物質文明とも言い得る現代において、それへの強烈なアンチテーゼとも言えるシュタイナー教育の玩具や、桜沢如一の「玩具は不用」と言い切る姿勢を考察することは意義がある。このような思考は、現代においては主流ではない位置づけがされるであろうが、その奥にある考え方を採って現代の玩具と子どもの本質的關係を考える手だてにしてみよう。

## 桜沢如一の考え方と玩具

桜沢如一（一八九三—一九六六）は、古代中国における伏羲の易に源を発する陰陽論を柱に、宇宙の秩序に即した人間の生活のあり方を明らかにし、あらゆる領域においてその具体的実践方法を提示している。この考え方はマクロビオティックと称され食養を中心として展開されたが、日本では一部を除きほとんど理解されず、欧米で根づき広く普及した。

彼はこの陰陽論で何を目ざしたか。それは人々に、自然に則した幸福な人生の設計方法を教えることであり、人間同士・国家間の平和な思想を築くことにある。彼はこの視点に立って子どもの教育・育児についても言及している。彼の著書である『食養生読本』から具体的な記述<sup>注2</sup>を考察してみよう。

「オモチャ——なるべく少ない方がよろしい。オモチャはなくともよろしい。ない方がよろしい。（中略）大人が自分と同様に思つて美しいオモチャを買つてくるのは、おかしいものです。オシャブリは、悪いクセをつけま

す。セルロイドの玩具は、火がついて一生、跡のこの大ヤケドをしたりします。」ここでは赤ん坊、幼児にとつての玩具は否定されている。

ここで述べられている美しいオモチャとはどのようなものか定かではないが、この文章が書かれた昭和初期はセルロイドのキューピー人形等が全盛の時期であり国産玩具の黄金期をむかえつつあったことを考慮すれば、量産される、セルロイドを主に用いた幼児用の玩具と考えてよいだろう。

桜沢はセルロイドの危険性まで付け加え、このような玩具の否定を強化しているのである。

次に、桜沢がフランスで見聞した女兒の遊びのようすが記されている。「おもちゃは、ごく少ないのですが、その一つにポロ切れがあります。それを姉の方のボールトがもつて遊んでいます。それは、お人形の外套にもなりますし、おもちゃの風呂敷にもなりますし、女中が来てお掃除を始めると、室々の床を拭く雑巾にもなります。」ここでは、与えられた非常につましやかな状況に

おいて、子どもの豊かな遊びを生み出している様子が語られてゐる。

桜沢はさらに、遊びについて次のように述べてゐる、

「遊ばせないのはかわいそうだ、というのは盲目的な母親の愛です。それよりも、小さいながらも責任のある仕事を常にやらせることは、なによりもいいことです。それは、忍耐力と注意力と、長時間にわたる耐久力を、しらすしらすの間に養います。」ここでは遊びそのものも否定する姿勢が語られてゐる。

桜沢が考える、子どもにとって必要な環境とは、「三分の飢じさと、三分の寒さ」であり、玩具の存在は、親の甘やかしの姿勢につながっているのである。遊びとしてはめぐまれない状況においても、不平・不満を言わず、ポロ布一枚で豊かに遊びを創造できる子どもが彼の理想とする子ども像の中にあるのだろう。子どもには簡素な自然なものを与えよという彼の考え方は、物質としての子どもの玩具を否定し、遊びそのものの必要性も自然から無に向かわせるのである。

ここで柳田国男が語る古来の日本の子どもの遊びの三つ(註<sup>3</sup>)の姿を思ひうかべることができよう。その一つは「子どもの自製」の姿である。豊かな自然の中で子どもは草の実やどんぐりを用いた自然素材遊びを充分楽しむことができた。二つめは親の目を盗んで、物さし、へら、鋏、針等を持ち出して遊ぶ「弄もよほび」の姿である。三つめは神社詣りの御宮筒に起源のある「買うて与える玩具」に遊ぶ子どもの姿である。

現代はこの「買うて与える玩具」が主流であるが、かつては大人の、子どもの玩具に対するかわりは非常に少なかったのである。桜沢が玩具は必要ないと語っているのも、その背影には、精神的に豊かな遊び状況が存続していたことを見落としてはならないであろう。彼が否定するのは現代の「買うて与える玩具」である。では「子どもの自製」あるいは大人の手作りの玩具についてマクロビオティックの考え方からどのような指針を得ることができよう。

桜沢は人間と環境との関係における「身土不二」の原

則について語っている。「身土不二とは、『人間が最も広い意味の環境の産物である』事を意味する言葉である。その土地、その季候、その産物の子たる人間は、その土地、その気候、その産物に適應する時その生を全うし、それに反逆する時悩み亡ぶといふのである。」<sup>(注4)</sup>

子どもは環境要因すべてを吸収して成長する。「玩具も環境の一要因である。この玩具が「身土不二の原則」において作られているもの、すなわち、身近かな生活環境から入手できる自然素材を用いた手作りであるならば、幼児は感覚的印象という食物を最も自然な形で吸収できるであろう。幼児が見て、触れて、想像するものには、この身土不二の手作りの原則は大きな意味を持つと考えられる。

食物ほど生理的に直接影響することはないという主張に対しては、「幼児は全身感覺器である」というシュタイナーの言葉を考慮すれば、その重要性は理解されるのではないだろうか。

マクロビオティックとシュタイナー教育の環境

桜沢は晩年、シュタイナーの人智学に出会っている。そして彼はシュタイナーの精神科学的な考え方との同一性を感じていた。しかし、これは物質主義的科学に対する精神科学という意味においての共通性であり、精神科学における東洋と西洋の方法論の違いは存在していた。この相違は子どもの教育観にも表われており、玩具の考え方の中にもそれを見い出すことができる。

桜沢のマクロビオティック的観点からみた玩具については既に述べたように限りなく自然、無に近づいている。一方、シュタイナー教育の観点では玩具は肯定される。

シュタイナーは玩具について重要な発言をしている。

「子供にお人形を与える時に、私達は一枚の古ナプキンを巻き、ナプキンの両端で足を、他の両端で腕をこしらえ、結んで首を作り、更にインキで眼、鼻、口を画くと一つの人形ができる。(中略)子供がナプキンで作った人形を目の前にしたら、それを人間として見なすために

必要なものを自分の想像の中から引き出して補わなければならない。この想像力の働きは、脳の形体を作り上げる営みに形成的に参与する。(中略) 生命のない数学的な形体からできているにすぎない玩具は、すべての子供の形成力に対して荒廢的で抑圧的に作用する。それに反して生命のあるものを思い浮かばせるようなものはすべて、正常な作用をする。<sup>(注5)</sup>

ここでは子どもの成長にとり、空想力を刺激し、生き生きとした有機的イメージを与える人形の重要性が語られている。ここで注意しておきたいことは、桜沢が語ったポロ布で遊ぶ女兒の姿と、シュタイナーの言う人形で遊ぶ子どもの姿は、ほとんど同一の子どもの本来の姿を示していることである。シュタイナー教育では、子どもに必要な人形の玩具像を有機的イメージという視点により意識化し、大人が物として介入してもよい限界を示すと共に、愛情を子どもに表わす方法を教えている。桜沢が考える子どもへの愛は、物質的に質素な状況を与えることであり、それがポロ布で豊かに遊ぶ子どもの姿を生

み出している。このように両者は、大人のかかわり方に違いはあるものの、子どもの遊びは、ほとんど同じ状況が求められているのである。

シュタイナー教育において子どもに勧められている玩具<sup>(注6)</sup>は、庭遊び用の玩具の他に「自然素材そのもの」である、まつかさ・石・貝がら、羊毛・木の皮・トチの実等と「手作りの玩具」である、木の枝の輪切りの積み木・小さなテーブルと椅子・簡単な木製の台・布製の小さな人形・小さな布・木製の人や動物等である。

これだけの玩具で七歳までの子どもの本質的遊びの要求である、模倣と繰り返しに答えることができるのである。

環境と人間の関係における「身土不二の原則」については先に述べたが、シュタイナー教育における「自然素材そのものの玩具」と「自然素材を加工した玩具」は、この「身土不二」の観点に適合している点に注目しておきたい。シュタイナー幼稚園で用いられる木の玩具は、近郊で切られた木を幼稚園で自然に乾かし、愛情を込め

て削り出される。積み木は、皮まで残した木の枝の輪切りであり、東洋でいう素材の全体的調和を示す「一物全体」に近い使い方がなされる。また、まつかさ等自然素材そのものの玩具は、幼稚園周辺の自然の産物である。

シュタイナー教育の玩具は精神科学的見方において創り出されているが、この東洋の見方において、大きな意味で「玩具の身土不二」が成立していることは興味深いことである。

### 一つの方向

以上、桜沢如一の考え方と、シュタイナー教育における玩具について述べたが、これらの考え方は、時代、文化的背景等が異なる現代の日本の子どもに、そのまま当てはめることは無理があるかもしれない。そこで、玩具の歴史の全体像を通して、それらの位置づけを考えてみよう。

現代は、今までに述べてきた太古の玩具・自然素材の玩具・数量概念を基にした玩具・プラスチック玩具・シ

ュタイナー教育の玩具、さらには桜沢如一の「玩具は不用」という考え方等が混沌として存在していると言えるであろう。

つまり、現代に存在するあらゆる玩具の考え方と玩具は、玩具の歴史を語っているという見方ができるのではないだろうか。

現代の子どもは草花でも遊び得るし、プラスチック玩具でも遊び得る。もちろん現代は後者の志向が主流になり、それは時代の流れの上で否定はできないことではあるが、あえて、この玩具の歴史的全体像における調和ある姿はどこにあるかを探してみよう。

それは、精神性と物質性がバランスのとれた姿であろう。大古からの精神文化と、人間が用いるものを作る技術が調和する為には、行き過ぎた高度な技術は必要としない。子どもが、この物心両面を吸収し成長する上にも、この技術の優先しないもの、作りの姿勢が要求されるであろう。

木の玩具の生産量は年々減少傾向にあるが、こういっ



た木を用いた小規模生産の形にこそ、作り手からみた調和のとれた姿の一つがあるのである。

また、子どものかわりという視点でみると、大人の介入が少ない玩具ほど、子どもに空想力・手の活動・技術の修得・人と人との交わり等を自分で生み出させる傾向が大きいことに気がつく。

大人は教育という形の介入で子どもの遊びの本分を侵してはならないだろう。大人は玩具に対して、節度あるわずかの介入が許されるだけではないだろうか。それは、それぞれの玩具を作る立場内で、できるだけ、素材を自然なものに、技術を一步プリミティブに、そして、子どもの前にある大人の生き様を一步精神的に、自然に目を向けることではないだろうか。これは、物質文明における調和を求める一つの方向であると言えよう。

次の機会には、以上の考え方による具体的な玩具の姿について触れてみたいと考える。

(名古屋女子大学)

注1) ヴァルター・ベンヤミン、丘澤静也訳「教育としての遊び」晶文社

注2) 桜沢如一「食養人生読本」日本C I協会

注3) 柳田国男「子ども風土記」角川書店

注4) 桜沢如一「無双原理・易」日本C I協会

注5) ルドルフ・シュタイナー、大西そよ子訳「精神科学の

立場からみた子供の教育」人智学出版社

注6) フライア・ヤフケ、高橋弘子訳「シュタイナー教育の手づくりおもちゃ」イザラ書房

# 痛い痛いのとんでゆけ（その六）

——友達の輪の中で——

蕪木寿江

十一月五日

登園するとすぐ年少組に行き、積木を重ねてお部屋をつくりままごとをする。エプロンをかけて木の葉やどんぐりを使ってご馳走をつくり呼びにくる。手をひっぱって連れてきて、「なんのご馳走でしょう？」と問いかける。「木の葉のポテトチップ」と答えると、「そうです」と満足そう。時々事務所に行くが、書類をいじらないですぐに戻りままごとの続きをする。「そのまま、そこで遊んでいいわよ」と言われたが、お弁当の用意をしますとままごとを持って自分の部屋に引越しをする。そして又続きをする。折紙の切れ端のご馳走が散らばってしまったのを「片づけられない、できない」と言って実習生に片づけて貰う。各組からお布団やぬいぐるみを持ってきた。「象さんが生れたの？」と聞く

と、「赤ちゃんが生れたの？」と言って」と言う。転勤で退園したまことちゃんにあげる絵を描いているとK夫も描いた。そして、「まことちゃん、どこへ行ったの？」と何度も繰り返し聞いて聞いた。お弁当は食べなかった。お母さんが迎えにくると、「どうして僕だけ早く帰るの？」と言ってさっきのままごとを始めた。それから例の地図を描いていたが、（この地図をかく時はどうしてよいかわからない、不安定の時のような気がする。）お母さんと一緒に帰った、と思ったら途中で幼稚園に戻ってきた。お母さんが青くなって「家にいませんけれど」と心配した。

雨あがり、すのこが泥だらけになったので（工事中的こともあり）「よごさないでね」と紙に書いて貼っておくと、それをK夫が読み、雑巾を持ってきて一人で拭いてくれた。

十一月六日

風邪気味だけれど「電話をかけても通じなくて」とお母さんが言われて登園してきた。すぐ昨日のおままごとの続きを積木を並べて部屋をつくった。友達も大勢手伝ってくれた。どんぐりや木の葉を使ってよく遊んだ。他の先生も呼んできてはご馳走を食べさせた。りして楽しそうだった。こんなにのどかな日が、こんなに早く来るとは思わなかった。お弁当にうどんとお粥を持ってきたが、（白いものなら食べられるようになってきたが）かぜ気のせいか食べなかった。「帰りたくない」と言いながら帰る。

十一月七日

登園した瞬間から「今日は何して遊ぼうかな」という表情をしていた。「おままごとする？」と聞くとストーブのある場所に積木を運んでお家を作った。名札を見ながらだっただけれど友達の名前を呼んで一緒に作った。くじをつくって、「白いいのはいい、赤い色を引いた人は、はいったらだめ」と言ったのでだんだん友達が少なくなってきた。「お友達がいなくなっちゃう」と悲しそうな声をあげる。しばらく遊んでから、みさこちゃんにひっぱられながら嬉しそうに、てれくさそうにリズムをする。紙芝居になると又不安定になり、前へ行ったり、後へ来たりしていつの間にかいなくなり事務所へ行ってしまった。お母さんが迎えにくる。「僕だけどうして帰るの？」と何度も聞く。「お遊戯ができるようになってね」とお母さんが言う。「僕、七・五・三のお遊戯したのに……」と言いながら引きずられるようにして帰る。

十一月八日

砂遊びをしたり、園長とボールで遊んだ。ボールがくると恥かしそうにしながら蹴っていた。お誕生会なので、「並びましょう」と言うと、とても辛そうないやな顔をした。友達がホールに入ってしまったら一人で部屋にるのが淋しいのか、一度来て見たが入らず、年少の部屋に自分の道具を持って行って、七・五・三の鈴の袋を先生と一緒につくった。それを飾ってもらい嬉しそうに眺めていた。ホールで映画が始まると後ろの方から入

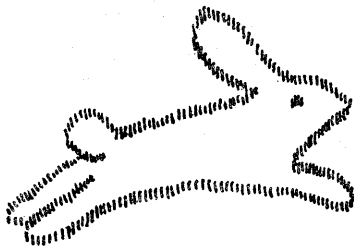
ってきて興味深そうに初めて最後迄見た。お母さんが迎えにきたので「映画を見たんですよ」と話すと、「物語りのようなものですか?」と聞かれるので、「そうです。よく内容がわかって見ていましたよ」と答えると、「そんなことありえなかったですが……」と半信半疑であった。「K夫はそういう子だ」と、お母さん自身が一つの枠をきめてしまっているような気がする。まだまだ六歳——、人生始まったばかり——。

十一月九日

台所からお誕生会のお菓子を持ってきて、自分はラムネ、友達には飴を配って歩いた。食物に興味が出てよかった。それからカルタを持って年少組の部屋に行きしばらく遊んだ。年少さんのお誕生会で皆ホールに行ってしまうと先生と外で遊んだ。じゃんけんをするといつもあとだしをして負けることを考えついたようだ。ともちゃん、たかしちゃん、ゆうちゃんとよく遊んだ。切手や印刷物やその他の物ではなくて、友達と一緒によく遊んで、友達と遊ぶようになったのがなんと言っても大きな成長である。

十一月十日

登園するとしろ組へいっておままごとを始めた。K夫



はお父さんになり、「男の子はませない」と言っていた。あきちゃんが、「男の子もませてあげていいでしょう」と言ったがゆずるちゃんを押しつけて女の子とばかりと遊ぶ。しばらく遊ぶとおままごとの道具を全部持って自分の部屋に帰ってくる。「わたしのまね」をピアノに合わせて友達がしていると、自分も少し体を動かしていた。エプロンをかけたままピアノに合わせて歩いたり走ったりした。K夫がいる間は紙芝居は止そうと思っていたが「今日は大丈夫かな」と思っていると又不安定な状態になってきた。「絵を見てはわからない、字を読まないと言っていることがわからない」と言いながら後ろの字を読んでから前にまわって見るというふうは何度もしていた。絵を見て話を聞いて想像するというごく自然のことがK夫にはむずかしいことなのだろう。

十一月十二日

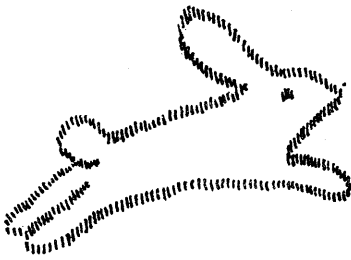
お店屋さんの品物をつくり始めているところへ登園してきた。「小さい組につくってあげてね。年少さんが買いにくるのよ」というと嬉しそうに一緒になってつくった。できあがったものをみて「これはよくできているから二千四百万円、これは千円」といいながら漢字で定価を書いた。お金という夢中で沢山つくるので、お店やさんごっこのお金は「木の葉にしましょう」と話し合う。それでもお金ばかりつくるので「年少さんの喜ぶものをつくりましょうよ」というとお金をやめて、めがねや望遠鏡を友達と一緒につくる。お弁当になったので「K夫ちゃん今日はどこに座るの?」と聞くと「今、考え中」と言

って黒板に一人で描いていたので「K夫ちゃん、どこに座ろうか、って考えているんですけど」とみんなに話すと「ここに座ってー、ここにきてー」と、大勢が声をかける。まきちゃんの隣に座るとみかんをぱつと取った。まきちゃんが「一つはあげないわよ」と言っ  
て半分にしたがそれは食べずにカールだけ少し食べた。友達が持っている食物に興味を示したのも初めてのことだ。

十一月十三日

兎小屋に友達が入って抱っこしていると自分も入り「今、可愛いがっているのです」と言っ  
て二十分以上も餌をあげたり撫でたりしていた。餌を食べなくなると「今おなが一杯なのかな？」と先生に話しかけていた。(兎も見えなかったのに、三月号参照) 部屋に入  
ってきて売り屋さんの品物をつくり始め一時間半集中してやる。友達の持っている箱が欲しくって「ください」と言った。「同じ箱はないのよ」と言うと「すぐください。四秒以内ください。一秒・二秒・三秒……」と数える。涙をパァッと浮かべるが、今迄のように泣き叫ぶことは全くなかった。

十一月十四日



お店屋さんごっこの品物が並んでいると、両手でガシャガシャかきまわしただしたので外へ誘う。車屋さんになって人が乗っているように「お花畑にお願いします」「はい、よくつかまって下さい」「兎小屋にお願いします」「はい、つきました」と言いながら一人で遊んでいた。部屋に入ってきて「カメラが足りないからつくって下さい」と言ったり「このお面をお願いします」と言っていた。自分が早くお店屋さんになったのか年少さんにある屋台を持ってきた。友達がいるいと並べて売り屋さんにしてくれたが、そのうちに年少さんのお店の看板もはがしてみんな持ってきてしまった。「お友達は沢山いれば楽しいけれど、こんなにいっぱい持ってきてしまうと小さいお組さん困っているわよ」と言うと、涙は流さないが眼の周りを真赤にして話を通じたようだった。「このはやさん」という名前のお店屋さんにした。その看板の裏に「よくばりさんは、はいれません」と書く」と「よくばりってなあに？」と聞くので「何でもかんでも沢山欲しがらんよ」と言うと、「よくばりは誰？」と聞くので「ここには誰もいないわね」と話すとうなずいていたが、結局、看板をかかえる程持つて家へ帰った。

十一月十六日

「お店屋さんがない」と言っに入ってきた。昨日の様子では折角のお店屋さんごっこもK夫の混乱を誘うようで一部かたづけしてしまったのだが、又、ダンボールを重ねてガムテープでとめて先生と一緒に売り屋さんの台をつくった。「どうしてお客さんがこなくなっ



たの？」と悲しそうである。「又、おもちゃをつくって並べましょう」と言うとはつとした顔になる。しばらく空箱でつくっていた。「お弁当を食べてから続きをしましょう」と言ったがふり向かなかった。「K夫ちゃん、どこの席で食べようかな、って言っているわよ」と言うと、又みんなが「ここにいらっしやい」と呼んでくれた。とても嬉しそうににっこり笑う。「お当番さんと一緒に牛乳を配る？」と聞くと喜んで配った。「のりえちゃんがまだない、って言ってるわよ」と言うと、一人、一人の顔を覗いて持っていた。続いて年少組まで配り始めた。それから先生の隣でお弁当にした。お母さんが迎えにくると又、「僕だけどうして帰るの？」と言うので、K夫の気のすむまで遊んで帰った。

十一月十七日

走ってきてすぐお店屋さんを始めた。お金にこだわらずつくったり、売ったりしていた。外で焚火をしているので「K夫ちゃんも外に行ってみる？」と言うと、とびはねて外へ行き焚火を囲んでリズムをしていた仲間の中に入った。どの友達とでも手をつないで生き生きとしていた。二・三度、土をかけてふざけていたが、「火が消えてしまおうわよ」とそおっと話しかけると、もうやらなかった。そして又友達と手をつなぎ「垣根の、垣根の曲り角……」と小さい声で歌っていた。K夫のはずんだ足どりが、友達の前で何度も円を描いてまわった。

(市が尾幼稚園)

## 子どもの遊び（その5）

E・A・A・フェルメール

浜口順子訳



### （四）遊び的造形

これから扱う遊びにおける「形式（形態）」には、伝統やルールによって成立する形式とは全く違う意味がある。それは確立されている形式というのではない。なぜなら子供が自ら喚起する形式だからである。前節で述べたような伝統的な諸形式あるいはルールなどは、核としての遊びをとり巻く周辺の領域に属するが、これとは対照的な、子供自身の「形式（形態）」で彼らは大いに遊ぶのだ。

ここで論ずる遊びの位相において、形態（形式）付与こそが遊びの本質である。形態付与はすなわちセンス、ゲシュタルトであり、そこで子供は遊びを把握する。具体的にはブロックの塔、道路を掘り抜いた砂山、あるいは遊具の美学的な組み立てや、人形用の小さな家具などをめぐって、形態付与はすすんでいく。形態付与はこの場合、子供独自の介入的行為であり、変化を及ぼす。し

かし、この介入は欲動的傾向から起こるのではないし、ましてや模倣や目標到達などをめざしているのでもない。後者については後で言及しなければならぬ。

子供自ら形態を与える時、たとえば塔を立てようという時、他の人の作った手本どおりにやろうとはしない。しかし、そこでの形態というのは、それまでに何度となく同じ様式で誰か他の人たちによって作られたことのあるような、ごく単純なものである。人形のお家にままごとの家具を気の向くままに並べたとしても、その結果としての配置は、すでに他の誰かによって同じ様に実現されたことがあるかもしれないのだ。しかし子供が関与しているのは、形を模倣させようと他者のためにあるような結果物ではない。形態自体とその形成過程に関与しているのである。そうした形態付与は、生産物の効用を目的とした労働生産のような、形態の外側にある目的のための創造活動とは異なる。たしかに形態付与の過程で、ある目的が浮上してくることはある。たとえばブロックを積み上げているうちに塔を完成させようと思立

つ場合などそうだが、これには自己獲得への意識が作用している。その際形態付与の中にある遊び的特徴は消失する。なぜならそこで作ろうとめざされている(塔)のは、形態付与および結果的形態の外側にあるものだからだ。自己獲得を意識することによって、子供が塔を作りながら、その塔自体よりも讚嘆すべき見栄えの方に気をとられてきていることがわかる。形態自体には属さない外側にある目的に専念することによって、形態付与はたやすく変容し、利潤目的の労働のようになる。目的性の変化しやすさに目を向けてみよう。

ここで「形態付与」と「遊び的造形」という新たな区別が必要になる。形態付与の過程において、驚きや期待がいつ訪れるかわからない真の遊び的対話(訳註、遊ぶ主体と対象との間の)が起こる。それは偶然的な結末を伴う遊び的即興ともいえる。これが遊び的造形であり、結果物としての形態を形成しようという目的性は見られない。この遊び的即興こそが本当の遊びである。子

供が塔を作ってもそのままではとどまらず、形をさらに変化させていく。形態付与を可能にする（自由な）変形性と共に子供は遊ぶ。この遊び的造形を、結果的形態の創造としての形態付与と区別しておきたいのである。形態付与は結果として生じる形態へと強く方向づけられているものの、遊びに特有な遊ぶ者とモノとの対話や、驚きの瞬間を導く何かをもなお保有している。期待（訳註、驚きと共に遊びを持続させる一契機である）についても同様に考えられよう。形態付与は誰よりもまず子供自身によって統轄・管理されているのである。

遊び的造形を、感覚受感的遊びと対にして理解することができ。ボールを使った遊びの循環性運動からサッカーなどのルールを伴なう遊びが生じてくるように、造形的遊びは感覚受感的遊びから派生し得る。感覚受感的遊びが素材の感覚性と共にすすむのに対して、遊び的造形は変形性をめぐって繰り広げられる。

感覚受感的遊びの際もそうだったが、遊び的造形もやはり砂浜で観察することにしよう。見る者の目にとびこ

むのは子供が砂や水をかき回したり、かき分けたりする様子だけではない。子供は形を与えようともするのである。バケツを使って「砂のケーキ」を焼くこともあるが、大抵は何の道具も使わない。砂山を作り、道路を掘り抜き、城砦を築いてその外壕には水を流し込むこともできる。遊び的造形は、形をめぐって不断になされる運動であり、計画なしで山路を掘ったりダムを築いたりするものの、形態なき結果とはならない。それは即興的に繰り広がる変形だが、たとえば子供の帰宅時間などには偶然中止するのめやむを得ない。遊びに取り組む上で計画性・プランというものはなく、「何が出来るかそのうちわかる」と答えられるような態度が要請されている。

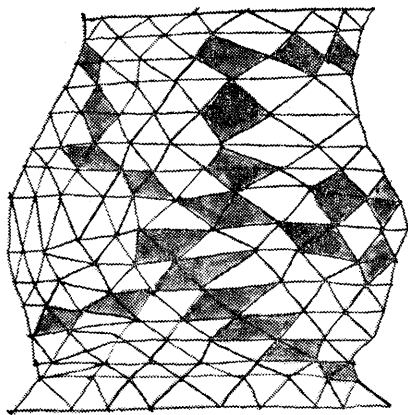
しかしこの遊び的造形は形態付与への容易に変化する。運河をめぐらしたとりでを作ろうというような目的意識が生じる場合などはその一例だろう。その子供は結果としての形態と関わっているのであり、その形態には子供自身の意図に沿って作られたもの以上の発展性は

見られない。

「常識」では、製作的な活動の方が遊びよりも高い価値があるとされている。子供もこのことには気付いている。そのために気の向くままに即興的に遊んでいる途中で、家に帰らなければならぬことを思い出すと、「まだとりでが出来ていないから完成させなくてはならない」というプランを作りあげるのである。このプランは多分その時点で思いついたばかりのものだろうし、同時に遊び時間を延長するための動機にもなっているのだろう。最後まで遊び通したいこともあれば、途中でやめてしまってもかまわない場合もある。子供はこの違いを直観している。ところで形態付与がいかんして起こるのかという問題がまだ片付いていない。砂浜でのすてきな午後遊び時間を延長して作ったとりでは、それ以上の発展性がないのだろうか。

遊びを観察する際、目的意識の変化には常に注意していなければならない。遊びはその形態をいろいろに変化

させるだけでなく、遊びが遊びでなくなることや、その逆も起こり得る。殊に遊びの造形と形態付与とは容易に入れ替わる。形態は変化しながら、斯くあるべしという一つのプランへと向かっていく。しかしまた逆に、不意に訪れた驚きや、形態付与の過程で子供が諸印象を広く受容する開示性、あるいは固定的なプランにとらわれない子供性などによって、目前にあるプランがまた簡単に



解消されてしまうのである。

ところが時がたち子供時代を過ぎた後にも、この遊比的造形は起こる。他のことに気をとられたり人の話に耳を傾けたりしている時、自由な思いつきの中で落書き絵を描いたり、手元の何かをもて遊びつつ次第に形を変えていくなどの形態遊びをしたことのない人はいないだろう。ドイツ語では *Basteln* (組立)、あるいは *Gestalten* (形成) などという形態付与 (蘭: *vormgeven*) は、子供の創造性を目的指向的に表現したものである。もともと子供が形態模倣をしない限りにおいてであるが。遊比的造形を即興的に喚起するので、常に創造的であるといえる。子供の即興性には直観可能性が前提とされるので、これ故に形態を伴なう遊びを審美的遊びと名づけることができる。遊びと芸術との親近性がこの遊びにおいて示されているが、「審美的」という用語は「印象に形式を与える自由の活用」という意味以上に拡大解釈されるべきではない。子供は受容した印象の一般的な意味 (センス) をまだ追求しようとはしていない。遊びの中

の諸形態はまだ子供の人格的な表現にすぎないのである。<sup>①</sup>

### (五) 遊びと自由表現

形態付与と遊び的造形の両者を観察し得る領域がまだある。自由表現と呼ばれる領域だ。子供は発達するにつれて、自分の印象を豊富に把握することが可能になる。

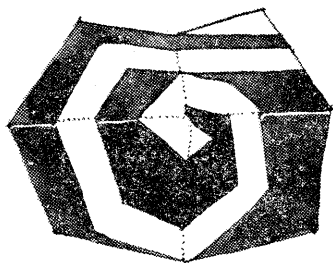
幼児期後期に形態付与が出現してくる。そのため幼稚園では描画、粘土細工、切り絵などの機会を与えて子供の創造的意欲を刺激する。鉛筆、紙、絵筆と絵の具、粘土や積み木などの材料が提供され、子供はお手本なしに自由に形態付与や遊び的造形に取り組む。自由表現やレクリエーションとしての手工芸は小学校教育課程においても必要なオアシスとして取り上げられており、学校生活の中で学習・作業面からだけでは満たされない部分を補っている。<sup>②</sup>

こうした型のレクリエーションへの関心の高まりはま

だ他でも見られる。クヴァント Kwant は『人間と表現』の中で次のように言う。<sup>③</sup>今日の表現的生活はもはや科学・技術の過剰に従属した状態にある。一方「洗練された過去の形式」からは遊離しており、芸術面においては解釈があまりに知的明解性に傾倒し、身体的存在の根源的自然性が軽視されてきている。その結果手工芸は新しい意味を持つようになった。昔はこういう仕事は社会的弱者層に託されていたが、技術革新によってその労力が解放された。「人々は今や手を使って働こうとしている。楽しいから容易なことなのだ。」こうして可能性を増大させた身体的表現の可能性は、他の芸術的表現形態においても追求されている。ここには原始主義の危険が潜んでいるが、だからといって逆に根源的な身体的存在を超越して、洗練された文化形式へと排他的に突き進む必要もない。

以上、自由表現という領域において子供が創造的存在として二通りの様式をとっていることを見てきた。つまり諸形態と戯れ遊ぶ様式（遊び的造形）、そして形態付

与の様式の両者である。子供は成長するにつれて形態付与を上手に行なうようになり、いろいろの不安定な印象に左右されつつ自然的傾向によってコースから逸脱してしまうことが少なくなる。幼稚園児と小学校児童の絵を比較してみよう。幼児の絵には画像の遊び的な繰り返しや変化が見られる。真っすぐな線、揺れる曲線、ぐるぐるとめぐる線、各種の図形などは、画用紙という描画空



間のうごめく、子供の自然リズムの表現なのだ。小学校児童の絵では物の形態がより固定的となる。彼らは知識をもっていることにはなおさら熱心になる。つまり次第に批判になっていくのだ。それによって物の形態には遊び的側面が失われてくる。この点で幼児絵画との区別がつくのだ。しかしながら形態付与における根源的なるものは保持されていくのであって、これが児童画の特徴となっている。

形態付与的な創造性が阻害されてくる小学校児童にとって、具体性が增大するのは彼らの目的意識と相反する事象である。そして次第に模倣へと向かい、手本として他の人の前例を利用しようとする。お手本どおりに男の人や、お家、家のようなキノコを描くのだ。この年齢の子供たちには、一方に成長する自己意識があるにもかかわらず、形態模倣が一定の役割を果たしている。またこの点は、この年齢層の子供達に創造的表現の機会を与えたいと思っている者達にとって、苦勞の種だともいえるのだが<sup>④</sup>。しかしながら小学生達は自信にあふれた形態模

倣者である。往来でやる伝統的形式の遊びに参加するのと同じ熱心さで、お手本を模写するのだ。

美術教育においても伝統的な理解というものが存在しており、子供は―自然主義的な芸術理念に従って―実際に見えるものを(写真のように)描くように指導されている。しかしこのような伝統的方法は、自由表現における子供の自由を守ろうとする人々との争点になっている。形態付与による子供性の表現が、描画ほど明らかになるところはない。遊ぶことと同様に、子供の形態付与は非常に根源的であるので、大人はそこに芸術的理念をすら追求しようとする。子供の表現の自然性が注目されることと、昔の洗練された形式を忌避する傾向とは好対照をなしているといえよう。「表現的生活の中に身体と生のリズムとの連関が見出される」<sup>⑤</sup>。

子供の遊びや形態付与に大人は多大な関心を寄せている。子供は形態模倣をするが、また遊び的造形を生む自由をも発見する。子供は創造的な形態付与を可能にする世界から、ある関係的位置を見出すのである。親との同



一化だけでは十分ではない。子供は自ら誰かになろうとするのであって、身体性の発達および身体性からの発達によって自我を形成していく。(つぐく)

原註・参考文献(抄)

- ① M. Merleau-Ponty, *Signes*, Gallimard 1960, p. 64 「遊びと遊び教育学的問題」(フュルメール著)では、本節で扱われている多様な遊び行動は審美的遊びと名付けられている。ここでは遊びと芸術との違いと一致点について考察されているが、芸術領域の扱いは精密さに欠け、無論より専門的な分析を必要としている。したがって人間存在が何か個人的な事柄を表現する表現力を表現形式に与えるには自己省察が有効であるに違いない、という意見ははまだ根拠付けの余地を残している。この段階まで子供はまだ達していないが、形態的に子供性を表現することによって既に傍観者の気持を動かすことはできる。

② P. Moor, *Die Bedeutung des Spiels in der Erzi-*

ehung, Bern 1962. 表現的充満と形態付与 (Fülle und Form) について論じられている。

③ R. C. Kwant, *Mens en expressie*, Aula 377, 第

四章 'Utrecht/Antwerpen 1968. 『人間と表現』

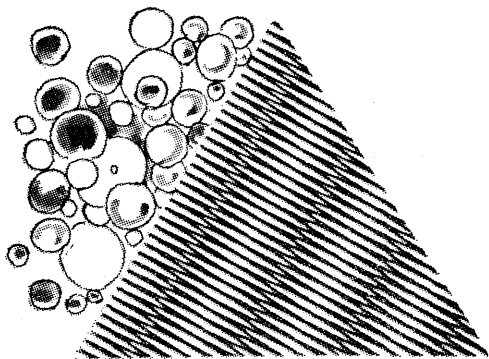
④ V. Lowenfeld, *Creative and Mental Growth*, N. Y. 1964.

⑤ 原註③参照。

(お茶の水女子大学大学院)

若いお母さんたちへ

はるにれの会 川上美子



はじめに

この原稿を依頼された時、実際のところ、他の人に読んでいただけるようなものができるかどうかわ自信がなかった。しかし、これを機会に自分のこと、子ども達のことをふりかえてみようと思ひ、思い切ってお引き受けた。しかしなかなか原稿を書く気持ちにはなれなかった。私なりに頑張っている子ども達と生活しているつもりでも、一日が終ると充実感というより疲労感が大きい。長男Tは三歳四ヶ月、次男Hは十ヶ月である。子ども達それぞれに手がかかり、日中はごちゃごちゃした生活である。今現在の状態をそのまま受け止め、時が経てば成長するという

心のゆとりがなかった。育児疲れだったのだろう、なんとなく育児に対し心細く心の揺らぐ日々だった。公共の場でも、いつもの家の姿でTが行動すると、まわりの人に注意される。いろんな人に、注意されたり教えられたりするのはいいことだと思いつつも、私の育て方が野放図すぎたかなと思えたりもする。また公園で楽しそうに子どもと遊んでいるお母さんを見ると、自分がいかにも冷めているように感じられる。

この原稿が出来上がる過程は、私自身を見つめなおし、忙しい育児の中で自己を確かめる過程であった。とにかく、心のありのままを見つめようと心に定めた。これは私が保育を考える原点である。

## 一、水戸旅行

四月上旬のある日、私はふと、心の通じ合える友人に会いたい気持ちにかられた。それで、水戸郊外にいる私の友人と何度か訪問したことがある、水戸に住む主人の友人のお宅へ伺う計画を立てた。家族旅行ははじめて

で、十ヶ月の赤ちゃんを連れ出すのは少し早い気もする。しかし、私のアイデンティティーを求める、必然的な心の欲求だった。二泊三日の短い旅行であったし、次男Hが常にガサガサしていて手はかかったけれど、自分が揺いでいた私にとって、新鮮な体験であった。日常生活から脱け出た解放感があった。しかしそれ以上に、この旅行で会った人のさりげない好意と、その人の生き様からにじみ出る言動に、私は多く学ばされ、私自身をみつめなおすことができた。

### (1) 主人の友人Kさん夫婦

Kさんは茨城県庁に勤めるかたわら、陶芸の道歩んでいる。陶芸の道で知り合われた奥さんとの間に小学校に通う三人のお子さんがおられる。以前会った時は下の女の子さんがまだ赤ちゃんの頃だった。私はその時まだ子どもがいなかった。育児にお忙しい時期であり、奥さんとゆっくり話すこともなかった。数年経てお会いし、一見して落ち着いて頼もしいお母さんという感じがした。私は小さい子どもを連れていたので、細々と心配り

をして下さった。家事も手際よく、教えられることが多い。草花が御夫婦で好きで、庭も自分達の好みに沿って手入れされている。食器や花器は手作りである。家中が、統一した主張が感じられる。主人の母がよく「居は心を映す」と言っているが、ほんとうにセンスのよさと人柄が感じとれる。

子ども達が寝た後、主人のもうひとりの友人もいっしょに、楽しい語らいがあった。その話の中で、保育にとっても、人間の生き方を考える上でも大切と思われる事柄が話された。そのひとつは、いいものは一年、十年と見ていると、飽きがこない。とにかくじーっと見ていると、よさがわかってくる。目利きは、すぐよいもの見分けがつくが、そうでない人は、じーっと見ることである。ふたつには、作品のよさは比較ではない。そのものらしいよさがある。人柄が表われる作品を創りたい。小さくても大きさを感ぜさせるもの、そんなものが作りたいていと言っておられた。会社では人が評価されるが、公正さが疑われ、人間的にすばらしい人よりも、むしろ表面

面のいい人、要領のいい人が評価されるそうだ。しかし、そうした人の評価で動揺することはつまらないことである。たとえ会社で出世してみても、必ず直面せねばならぬ死を迎えた時、肩書は何の役にもならない。そしてその夜の話のハイライト、Kさんのお母さんの辞世の句の話になった。Kさんのお父さんは、Kさんが小学校六年の時に病気で亡くられた。その後Kさんのお母さんは、女手ひとつで三人の息子さんを育てられた。そのお母さんが、三年前、千葉の国立病院で家族の看病の効もなく亡くなられた。亡くなられた後、かばんの中に家族の皆さんに宛てた手紙がみつかった。その手紙の最初に書いたためであったのが、次の二句であった。

我は行く 大手をふって 主のもとへ

我が命 残り少なか 人恋し

なんとすばらしい句でしょう。主とは、神様、イエス様とも、先立たれた御主人ともとれる。大手をふって死

を迎えることのできる人生とは、なんとすばらしいでしょう。Kさんは、よく車で水戸から千葉の病院まで、お見舞いに行かれた。いつもは早く自宅へ帰るようにおっしゃるお母さんも、いよいよ死が近いと察せられ、最後は「早く帰りなさい」とは言われなかったそう。Kさんはこの句を版画にして、飾ってあった。私達も一枚いただいた。

## (2) Aさん夫婦

翌日は、デパートで催されている陶芸展に連れていかれてもらった。その後、笠間の芸術の村で、急須だけを作っているAさんの仕事場に連れて行ってもらった。Kさんは、Aさんの作品は人柄が表われていると言っておられた。Aさんも、素朴で物静かで温かさを感じる方だった。Aさんの奥さんは、東京の本郷生まれの方で、小石川植物園が近く、草花が小さい時から好きだったと話しておられた。そして、「草花も十年経つと居心地がよくなるのでしょう。しだいにふえてきました。」と言われた。私は小雨に濡れる新緑のみずみずしさと、十年経つ

たら”という言葉が印象深かった。

## (3) 私の友人Mさん

二日目は、水戸の効外にいるMさんのお宅に泊めていただくはずだった。しかし、三番目の保育園に通うお子さんが水疱瘡にかかり、Mさん夫婦が任かされている水戸の養鶏場に少しおじゃました後、Mさんと私たちと水戸で会うことにした。Mさんは、大学を卒業した後一年間キブツで生活をした。数年後、キブツで知り合われた方と結婚された。第一次産業の生活をしたと思ひ、今の仕事を始められた。現在一万一千羽の鶏がいて、一日に八千個卵を産むそう。畑も土地を借り、苗作りからしておられ、農業も本式である。お味噌も大豆から作られるそう。上二人のお子さんは小学校三年と一年で、通学するのに四十分歩くとのことだ。農家は子どもにたやすく物を買ひ与えるそうで、ファミコンを持っていなのは自分のところだけだと言っておられた。お子さんがほしがらないそうで、上のお兄ちゃんは卵の選別等に役に立つ仕事をしてくれると話していた。これでいいの

かと考えることもあるそうだが、Mさんのしんの強さ、たくましさで敬服した。おいしいトマトがなる夏に、家族で会いましょうと約束して別れた。お互いに結婚十年、大学を卒業して十四年経つ。

(4)そして私

この旅行で、今の子どもとのごちゃごちゃした生活の中で忘れていた事を思い起こされた。ゆったりとした時の流れ、ゆとり、心の豊かさ等とは、程遠い生活であることに気づいた。

また、ひとつのことに打ちこんでおられる御夫婦の姿にも感銘を受けた。地道にわが道を歩んでおられ、確かに積み重ねられている。そして私……は。子ども達は疲れて眠っている。私は車に揺られながら、雨にけむる御前山に目をやった。ここは関東の嵐山といわれる美しい所であるが、八年前私は、この那珂川の清流に身を沈めて受洗したのである。私は心の源流に引きもどされたような心地がした。

二、変わりつつある長男

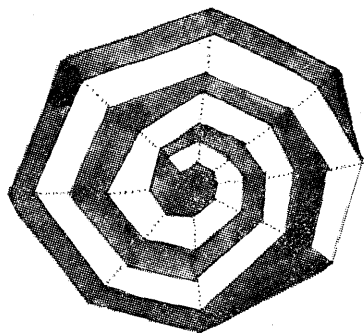
旅行によって、自分を確かめることができ、やっと日常生活や子どものことを見直す自分に立つことができた。この新しい自分の目で保育の記録を読みかえしてみた。

家でべったり母親といるより、幼稚園でお友達と遊ぶ方が、長男Tにとっていいのではないかと考えた時期があった。喘息の発作に負けない体力をつけるためにも、規則正しい生活をした方がいいのではないかと考えたのである。しかし、どうしても母親と離れることが厭とTは言う。又、何人かの方に相談したら、母親とべったりいたいと思う時は案外短いのだと教えてもらい、四月からもやはり家でTを見ることに決めた。そう決めたからには、Tが一日を楽しく遊べるように私は心掛けようと思った。それで三月から、翌日の遊びの予想と、家事の段取りを考えてその日に臨むようにした。

雨の降らない日は極力外に連れ出した。TとHがぶつかり合うのは、たいがい家の中である。Hは九ヶ月にな

ると、動きも活発になり、Tの遊んでいる所に這ってき  
てはかまう。Tは、電車の線路を組み立てて走らせる遊  
び、アイロン台や板をホームにして電車を並べる遊びが  
続いていたが、広い場所を使い、Hは自由にハイハイが  
できない。Tは私がいる所でないと遊ばないので、別々  
の所で遊ばせることもできない。Tは身の回りのことも  
まだひとりできない。トイレや食事、パジャマを着る  
時も、私でなくてはとごねる。人や物にぶつかると、他  
人や物のせいにして怒る。Hが十ヶ月に入ると、ますま  
すHも手がかかるようになった。だっこを強く求める。  
いろんなものに手を出したが、それを止めさせるとギ  
ャンギャン泣く。Tも、Hと同じことをやりたがる。テ  
ーブルに登ったり、哺乳ビンのミルクをほしがる。Hの  
食事中いっしょに入りたがる。おんぶをしてやっと寝た  
Hを降ろそうとすると、いっしょのふとんに入りたが  
る。乳首をいやがるHに、ミルクをなんとかして飲ませ  
ようとしているのに、そのミルクに横から手を出す。T  
はHにちよっかいをかける。おすわりしているHを倒

す。Hをわざとひとりにさせる。やっと私から離れて遊  
び出したHにいやがることをしたりすると、私のストレ  
スは最高である。寝る時Tに、「どうしてHちゃんにい  
たずらするの」とやばな質問をすると、「かわいいから」  
と言う。Hの方もお兄ちゃんがいないと寂しがる。男の  
子の兄弟ってこんなものなのでしょうか。私はへとへと



に疲れてしまう。

ところが四月の終り頃から少しTが変わってきた。四月から自由学園の幼児生活団通信グループに入った。そのせいもあるのだろうか。「おかあさん先生の言うこと聞いて」と言うと、やってくれる。朝起きるとおふとんの中から「だっこ」と言っていたのに、ある日、「ひとりで起きて来なさい」と言うと、ワンワン泣いていたが結局ひとりで起きて来る。次の日からひとりで起きて来るようになった。私がHの相手をして遊んでいると、Tはひとりで自分の遊びをする。以前ならば、「ママやっ」と自分でできることも私に要求したり、Hと私の遊びにわりこんで来ていたのに。「Hちゃんこわしいいよ」と自分が作った線路をかまわせる。

五月九日は特記すべき出来事があった。私とTとHは、隣の小学校二年生のMとその友達と近所の公園へ行く。Tは私と離れて、M達とジャングルジムや雲梯で遊ぶ。しばらくして私の所へ来て、「出来たよ」と雲梯で上がって降りてくることが出来たと、うれしそうに伝え

に来た。少しして、また遠くで見ていると、小学校一年生のKに鉄棒を回るのを手伝ってもらっている。また少ししてTが公園を出ていくのが見えた。公園の入口に置いてきた車を取りに行ったのだろうと思っただけで、なかなか姿が見えない。私はTを捜しに行くと、なんと家から砂場の道具を両手にいっぱい持って戻ってくるどころだった。今までになかったことである。

ひとりで砂場でよく遊ぶ。先程のKとその弟Uとその友人Mが加わる。近所には同年令の子どもがいらないなかで、このKとUとMは、私がよく遊ぶ子ども達である。が、いつになく砂場に集中して遊んでいるので、私はもっと公園にいたかったが、おんぶしているHの咳がひどくなってきたので、先に帰ることにした。だいぶ経ってから、背中から水と砂をかけられて泣き顔でTが帰ってきた。UがダメといったことをTがしたからだと自分で言っていた。私がいないとすぐ家に帰っていたのに、画期的な出来事だった。

少しずつTが変わってきていることがわかる。これか



らどのようになるのか、楽しみである。

### 三、何を優先するか

五月五日はHの初節句のお祝いをし、主人の母も来てくれた。ところが、ちょっとしたハブニングがあり、家の中がそうじと整理整頓ができてないと注意された。御小言を聞きながら、我ながら冷静に受けとめている自分に気づく。時おり来ては気づいたことをズバリと言う母の外からの意見は、子どもとの生活にどっぷりつかっている私にとって自分を見返す貴重な刺激である。確かに家事の中でそうじは二の次になりがちで、最少限に終わってしまう。整理整頓も頭を使う作業である。まつわりつく子どもと接しながらでは、片付ける一方で散らかり、それならいっそ子どもとつき合おうとなってしまう。子どもといえるうちに、居直りと、ルーズさが身についてしまった。子育ての時期は思い切って、しまってしまう方がいいと母に助言され、家中を点検してみようと積極的な気持ちになった。

夕方からHが39度2分の熱を出した。体がビクビクとする毎に目を覚まし、泣いて私の体にすり寄ってくる。

私は熱が下がり熟睡できることを祈りつつ、生命を預っている責任をひしひしと感じた。

子育ての真只中で、自分が何かに専念できる時間は、どれだけあるのだろうか。一日の限られた時間の中で、何を優先するかは、その人の価値観、考え方によって異なるだろう。

保育は過程である。母親にとっても過程である。今を子どもと生きる母親は、自分の生き方にかかわってくると思う。十年後、多少とも人間として、母親として、私は成長しているのであるか。ともあれ、数時間後には、また深く考える暇もなく、とめどなく押し寄せてくる子どもの世話の波を、元気に明るく乗り越えていかななくてはならない。

最近、ある雑誌社から独身女性の部屋の撮影をたのまれ、友人のつてをたよりに、数人の女性の部屋を下見に行った。

雑誌社の希望としては、何か新しさを感じさせる部屋で、読者が写真を見て「すてき」と思えるものとのことだった。

私の訪問した独身女性は、二十一歳から三十五歳で、豪華なマンションから、トイレも共同のアパートまでと、部屋の様子にも、かなりの差が見られた。紹介者が「すてきだ」と思える部屋であるから、それぞれ住む人の個性や生活への姿勢がよく現われたものばかりだった。

しかし、実際、雑誌の撮影を行なったのは、わずかに二軒で、他の四軒の部屋は雑誌には、のらないこととなった。その理由は「きれいな部屋ではあるが、何ら新しさがない」ためだ。雑誌の求める新しさとは、家具のほとんどない、広々とした空間のあること。それが、今、求められる新しさだから。ところが、独身女性の多くは、狭い賃貸に住み、内装を変

えることもままならない。だから自分の好みと部屋の状態の間で、かなりの妥協をしいられる。それが、新しさを感じさせない部屋作りの原因のひとつである。

しかし、より大きな原因は、独身女性を持つ結婚志向にあることがわかった。

つまり、「いつかは、結婚し、新しい住まいを築くのだから、その時、すべてを自分の好みにすればいい。今は、学生時代から使っているもので、がまんしよう」となるわけだ。独身女性の住まい観は、今の住まいを、仮のものと考え、本当の住まいは、結婚をした時、はじめて築かれるのだ。

独身女性の多くは、すてきな住まいの写真を見ると、「いつか結婚したら、こんなのがいいなあ」と思うのだ。そして、自分ひとりのために何かしようという人が、少ないのが、現状のようだ。

(普)

## 幼児の教育 第八十五巻 第九号

九月号

©

定価 四〇〇円

昭和六十一年八月二十五日 印刷

昭和六十一年九月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子  
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九一六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレイベル館にお願いいたします

# 筒井敬介童話全集 全12巻

ナンセンス・テールからシリアス・ストーリー

現代ものから時代ものと

多彩を極める筒井童話の集大成



定価各1,300円

名作「かちかち山のすぐそばで」など、数々の傑作を世に送り出している著者の作品を集大成しました。時代を活写する筒井童話の魅力がいっぱいです。その業績に対し、著者はこの度紫綬褒章を受けました。

- 第1巻 べ え く ん
- 第2巻 とらおおかみのくる村で
- 第3巻 日曜日パンツ
- 第4巻 かちかち山のすぐそばで
- 第5巻 おねえさんといっしょ
- 第6巻 じんじろべえ
- 第7巻 二人ともパンのにおい
- 第8巻 動物はみんな先生
- 第9巻 コルプス先生汽車へのる
- 第10巻 おしくらまんじゅう
- 第11巻 げらっくすノート
- 第12巻 ちゃんめら子平次

くわしくはフレーベル館代理店、特約店、支社、支店、営業所または本社営業部(03)292-7783代にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

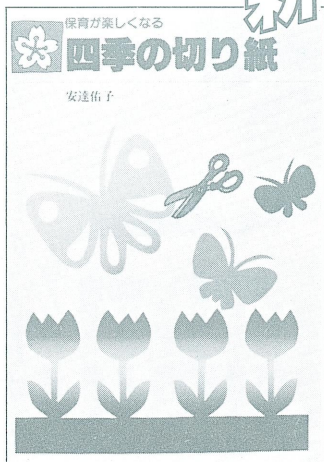
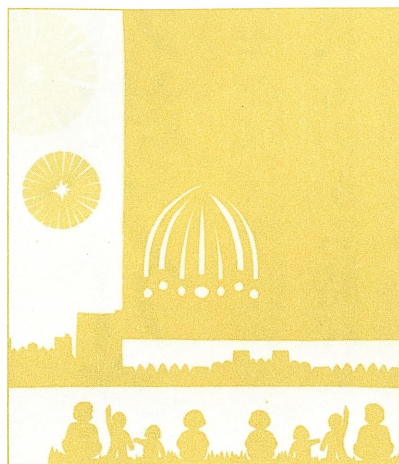
フレーベル館

保育が楽しくなる

# 四季の切り紙

安達佑子・著 B5判・128頁・定価1,600円

新刊!!



絵で見えてすぐに教えられる  
切り紙指導の入門書

- 切り紙は、子供たちに指先を使って物を作ることを体験させ、さらに知的発達を促す効果も大きい、理想的な製作遊びです。また、その季節に題材した切り紙で保育室を飾って、いっそう明るい雰囲気盛り上げるのも楽しいものですね。
- 本書は、〈花火〉〈赤とんぼ〉〈雪〉〈ひなまつり〉などなど、四季折々のテーマごとに作り方のポイント／ヒント／作品の飾り方を解説した切り紙指導の入門書です。イラストを豊富に使った解説は、紙工作にまだあまり慣れていない方にもわかりやすく、また題材もかんたんのできるもので構成しました。
- 資料として、切り紙の歴史、切り紙の基本的な理論、子供たちに初歩から指導していく際の具体的な方法なども備え、切り紙研究・指導者として現在活躍中の著者の知識と経験が全編に込められております。

## 内容



### 四季の切り紙

- さくら
- チューリップ
- ちょうちょ
- こいのぼり
- しゃぼん玉
- あじさい
- 海
- 花火
- 赤とんぼ
- クリスマス
- 雪
- ひなまつり

### 紙の折り方

各折り方の説明とその作品

### 資料編

切り紙の歴史と生活とのつながり  
折った角度・面の数  
多角形のつくり方  
指導の実際

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館